

『野性の棕櫚』における二つの愛の型

石川和代

Two Types of Love in *The Wild Palms*

Kazuyo ISHIKAWA

I

1939年に出版された William Faulkner の『野性の棕櫚』(*The Wild Palms*)は、「野性の棕櫚」(“Wild Palms”)と「オールド・マン」(“Old Man”)という、一見、何の関わりもなさそうに見える二つの物語から成り立っていて、その各章が交互に進行する形式をとっている。これまでも、『八月の光』(*Light in August*)のように、一つの作品の中に二つの物語が含まれるものはあったが、別々の題名のついた二つの物語が1章ずつ交互に描かれるという形式は、この作品がはじめてである。この一風変わった手法のためか、最初はあまり積極的な評価を受けなかったようである。オリジナル版では二つの物語の各章が交互に入っているにもかかわらず、Malcolm Cowley の編集した『ポータブル・フォークナー』(*The Portable Faulkner*)のように、二つの物語は関係がないとして、「オールド・マン」しか収録してない場合すらある。編集者も批評家も、Faulkner がこのような手法を使った意図が理解できなかったのであろうと思われる。

Faulkner は、1955年の長野でのセミナーの折、この手法を使った理由を次のように語っている。

To tell the story I wanted to tell, which was the one of the intern and the woman who gave up her family and husband to run off with him. To tell it like that, somehow or another I had to discover counterpoint for it, so I invented the other story, its complete antithesis, to use as counterpoint. And I did not write those two stories and then cut one into the other. I wrote them, as you read it, as the chapters. The chapter of the “Wild Palms,” chapter of the river story, another chapter of the “Wild Palms,” and then I used the counterpoint of another chapter of the river story, I imagine as a musician would do to compose a piece of music in which he needed a balance, a counterpoint.¹⁾

Faulkner は「野性の棕櫚」の方を中心に書き、それに対して、音楽の対位法のような効果を求めて「オールド・マン」を書いたのであり、対照的なものによって強調するという効果をねらったのである。また、1947年にミシシッピ大学で行われたインタビューの折には、この手法について、“I used that technique simply as a mechanical device to bring out the story I was telling which was the contrast between two types of love.”²⁾と述べている。私は、Faulkner がこの作品で描いた二つの愛の型とはどんなものであるかを考察してみたいと思う。最初に「野性

の棕櫚」について、続いて、「オールド・マン」について、ストーリーを追いながら考えていくことにしたい。

II

「野性の棕櫚」は、第1章では、ハリー・ウィルボーン (Harry Wilbourne) が死にかかっているシャーロット・リトンメイヤー (Charlotte Rittenmeyer) のために、屋主である医者に診察を依頼する場面を描き、第2章で二人の出会いにカットバックでさかのぼり、第3章、第4章と進んで、第5章で第1章の続きを描いて終わるという形式である。考察するにあたっては、二人の出会いから物語の最後までを順を追って見ていきたい。

ハリー・ウィルボーンは、医者であった父親からの2000ドルの遺産をもとに、切りつめた生活をして大学生生活4年間を終え、医学校に入り、姉の援助も受けながら勉強を続け、ニューオリンズの病院でインターンをしているが、27才の誕生日の朝、恋をしたこともなくすごしてきた27年間に空しさを感じる。

... on the morning of his twenty-seventh birthday he waked and looked down his body toward his foreshortened feet and it seemed to him that he saw the twenty-seven irrevocable years diminished and foreshortened beyond them in turn, as if his life were to lie passively on his back as though he floated effortless and without volition upon an unreturning stream. He seemed to see them: the empty years in which his youth had vanished—the years for wild oats and for daring, for the passionate tragic ephemeral loves of adolescence, the girl- and boy- white, the wild importunate fumbling flesh, which had not been for him;...

その日の夜、彼はインターン仲間の一人に誘われてパーティーに出かけていき、シャーロット・リトンメイヤーに会う。その初めての出会いで、ハリーはシャーロットの猫の目のように黄色い目にみつめられて、彼女のとりこになってしまう。彼女の目は“were not hazel but yellow, like cat's, staring at him with a specurative sobriety like a man might, intent beyond any staring.” (p. 39) であり、彼は“seemed to be drowning, volition and will, in the yellow stare” (p. 39) なのである。シャーロットは実業家フランシス・リトンメイヤー (Francis Rittenmeyer) の妻で、4才と2才の娘を持つ25才の女性である。平凡な家庭生活に満足できず、情熱的な愛にあこがれをいただいていた彼女は、Joseph J. Moldenhauer の指摘するように、“struck with sympathy for his poverty and inexperience.”⁴⁾され、彼を恋の相手として選ぶ。二人は5回ほどデートをし、5回目にホテルへ行くのだが、ハリーが貧乏であるためにそれが場末のみすぼらしいホテルであったことに気分を害して、彼女は一人でタクシーで去って行ってしまう。

本来ならば二人はこれ以上会うことはなかったはずなのだが、運命のいたずらといおうか、ハリーが病院へ帰る途中に1287ドル入った財布を拾ったことがきっかけとなり、彼はあと4ヶ月の医学実習を放棄してシャーロットとシカゴへ旅立つ。シャーロットの夫フランシスは、カトリック教徒なので離婚には同意しないが、毎月必ず便りをよこすという条件で、彼女がハリーと冒険を試みるのを許す。その上、まさかの場合にシャーロットの帰りの旅費としてのみ使うように指定した小切手をハリーに渡し、二人を見送るのである。フランシスが妻のシャーロットを愛していたとすれば、なぜこのように小切手まで渡してハリーとシャーロットを見送る

ことができたのかという疑問がわいてくる。おそらく彼も悩み、苦しんだにちがいないと推測されるが、結局は、Cleanth Brooks の言うように、“He wants to make sure that he is protecting his wife even though his wife has denied him and run away.”⁵⁾なのであろう。

ここで、なぜシャーロットがいとも簡単に家庭を捨てて、ハリーとシカゴへ行く気になったかを考えてみたい。彼女はニューオリンズの場末のホテルで、子供がいるからフランシスと離婚できないのだろうと言うハリーに対して次のように語っている。

I wasn't thinking of them. I mean, I have already thought of them. So now I dont need to think of them any more because I know the answer to that and I know I cant change that answer and I dont think I can change me because the second time I ever saw you I learned what I had read in books but I never had actually believed: that love and suffering are the same thing and that the value of love is the sum of what you have to pay for it and any time you get it cheap you have cheated yourself. So I dont need to think about the children. I settled that a long time ago... (p. 48)

ハリーにこんな風に語る彼女は、それまでに情熱的な恋の経験がなかったのではないかと思われる。男ばかりの兄弟の中で育ち、いちばん上の兄が好きであったが、兄とは結婚できないので、兄の友人であるフランシスと結婚した彼女であったから、それは仕方のないことであったかもしれない。本で読んだ romantic な愛にあこがれをいっていたとき、ハリーと出会い、彼女は共に愛を探求する相手に彼を選んだのであろう。「愛と苦しみは同じのもで、愛の価値はそのために支払わねばならない代償の額である」と考える彼女は、自分が求める愛の代償として家庭を捨てたのであり、Peter Swiggart の意見の通り、“Charlotte is genuinely in love and considers her flight from husband and children as a desperate sacrifice of a limited value for a greater one.”⁶⁾なのである。

シャーロットの愛に対する考えをはっきりと示しているのは、シカゴのホテルで2日目に彼女がハリーと交わす会話である。“Listen: it's got to be all honeymoon, always. Forever and ever, until one of us dies.” (p. 83) と語るシャーロットに対して、ハリーが“So it's not me you believe in, put trust in; it's love.” (p. 83) と言えば、彼女は“Yes. It's love.” (p. 83) とかさず答えている。シャーロットは常に新婚旅行のときのように情熱的に燃える愛を求めているのであり、ハリーを愛するというよりは愛そのものを愛しているのである。そして、自分の理想とする愛を探求する相手としてハリーを選んだと思われるのである。彼女の求める愛が情熱的な愛であることを考えると、“...she wants to keep love illicit in order to keep it passionate.”⁷⁾という、Kenneth E. Richardson の意見や、“Charlotte is determined to possess love absolutely, to be constantly, wholly, and intensely alive through the emotional force of love.”⁸⁾という、Sally R. Page の意見は的を得たものであるといえる。

シャーロットとハリーはシカゴで新しい生活を始めるが、何事においてもシャーロットの方が積極的で、ハリーは常に消極的であり、シャーロットの力に従っているように感じられる。シカゴのホテルに滞在して2日目に、彼女はハリーがまだ寝ているうちに出かけてアパートをさがしてくる。彼女は自分の趣味を生かして人形を作り、デパートのショーウィンドーの飾り付けをさせてもらい、その仕事なくなると、あやつり人形を作る仕事に取り組む。ハリーは慈善病院の実験室の仕事を見つけるものの、しばらくするとその仕事も失い、昼間はシャーロ

ットに内緒で、公園のベンチで時を過ごす。シャーロットはハリーが寝る時刻になっても、夜中に目覚めた時でも、一心不乱に仕事をし、二人の生活は主に彼女が支えているといえる。さらに、“She came and put her arms around him, hard, striking her body against him hard, not in caress but exactly as she would grasp him by the hair to wake him up from sleep.” (p. 88) や、“She took the book from him and put it on the converted table. ‘Get your clothes off,’ she said. ‘The hell with it. I can still bitch.’” (p. 93) などのような描写から感じられるように、sexualな関係においても彼女は aggressive であり、ハリーがふと “*Maybe I’m not embracing her but clinging to her...*” (p. 84) と感じるのも無理はない。Sally R. Page が、“In her relationship to Harry it is she who assumes the male’s role ;...”⁹⁾と述べる通りである。27才まで女性とつき合った経験のないハリーは、最初はシャーロットに対して、“It will be all right. I’ve just got to get used to love. I never tried it before; you see, I’m at least ten years behind myself. I’m still free wheeling. But I’ll get back into gear soon.” (p. 86) と言うが、シカゴでの彼女との生活を通して、次第に彼女の影響を受け、Joseph J. Moldenhauer が “Yet to Charlotte love is a religion complete in itself.”¹⁰⁾と述べるころの、彼女のいたく愛の理想を信じるようになっていく。シャーロットの仕事もなくなり、二人は経済的に苦しい状況に落ち入るが、彼女の知り合いの新聞記者マッコード (McCord) が友人と共同で所有しているウィスコンシンの湖畔の家で、しばらく暮らすことになり、残った122ドルの中から100ドル分の食料品を買いこんで、マッコードの車で湖畔の家へ送ってもらう。

湖畔の家では、シャーロットは毎朝泳ぎ、水浴と日光浴がすむと写生に出かけるといった生活をするが、ハリーは朝食のあとまたポーチのベッドにもどり、シャーロットが出ていくのを見送って、また眠り、目をあけると湖にいる彼女をながめるといった生活を続ける。ハリーについての “...but merely existing in a drowsy and foetuslike state, passive and almost un sentient in the womb of solitude and peace...” (p. 110) という描写は、彼の消極的な生活をきわめて象徴的に表わしている。そんな生活を続けているうちに、ハリーは “*I am bored, I am bored to extinction. There is nothing here that I am needed for. Not even by her.*” (p. 112) と感じ始め、シャーロットから絵の具と写生帳をわけてもらって、カレンダーを作り始めるが、単調な生活のために日の計算ができなくなっているのに気づく始末である。この時から彼は、sexual life においても自分がリードする立場になろうとする態度を見せるが、彼の態度が変わると、ベッドでのシャーロットの様子も、“...this time she got quietly into the narrow cot with him and this time she even crept close to him who had never before known her to do such at any time, to anything.” (p. 118) のように変わってくる。今まで男性の役割を演じていた彼女が、本来の女性にもどったといえるであろう。残りの食料が乏しくなったことを知ったハリーはマッコードに電報をううち、シカゴでシャーロットの仕事を見つけてくれるように依頼する。仕事が見つかったという知らせがあり、先にシカゴへ行くようにと言うハリーに向かって、シャーロットは次のように叫ぶ。

No! No! Jesus God, no! Hold me! Hold me hard, Harry! This is what it's for, what it all was for, what we were paying for: so we could be together, sleep together every night: not just to eat and evacuate and sleep warm so we can get up and eat and evacuate in order to sleep warm again! Hold me! Hold me hard! Hard! (pp. 118-119)

シャーロットにとっては、ハリーとの sexual な関係の中で愛の理想を探求することが生きがいなのである。

その後二人はシカゴにもどり、シャーロットは以前と同じショーウィンドーの飾り付けの仕事に励み、ハリーはエロチックな短編小説を書いて実話雑誌に売り、収入を得る。クリスマスが近づくと、店が閉まってから行うシャーロットの仕事は一層忙しくなり、彼女は真夜中すぎにアパートに戻るようになる。夕方から夜中まで働いて、夜明けから眠るシャーロットと、昼間タイプライターに向かい、夜眠るハリーとは生活時間が反対になってしまい、一緒にベッドに入ることもなくなってしまう。

生活費を稼ぐのに忙しく、二人の愛を充足させることもできない生活を続けていてはだめだと考えるハリーは、愛をより完全に充足させることのできる、自由で自然な環境を求めて、ユタ州の鉱山へ行くことを決心する。シカゴで生活している間に、夫らしくしよう、妻に最高のものをやりたいと考えるようになっていたハリーであるが、それは自分が体面のとりこになっていたからだと思い、Dorothy Tuck の指摘するように、“escape from a loveless and empty world of security and respectability”¹¹⁾しようとするのである。ユタ州へ出発する列車の発車時刻を待ちながら、決心したいきさつをマッコードに語るハリーは、シカゴで自分たちが住んでいたアパートについて、“We lived in an apartment that wasn't bohemian, it wasn't even a tabloid love-nest, it wasn't even in that part of town...” (p. 134) と言い、今の世の中には愛の存在する余地はなく、愛は“the mausoleum of love” (p. 139) になってしまっているとも語るのである。また、自分が体面のとりこになっていたことを後悔し、そうではないシャーロットのことを“*She's a better gentleman than I am, too.*” (p. 141) と言い、“*And maybe I can be the consort of a falcon, even if I am a sparrow.*” (p. 141) とも語るハリーは、シャーロットに対して劣等感を持っているのであり、ここにハリーの弱さがあるといえる。

ユタ州の鉱山では、ハリーは鉱山付きのもぐりの医者として細々と収入を得る。ここでは、鉱山支配人とその妻と同じ屋根の下で暮らすことになる。四人は一つの部屋で、床にしいたマットレスの上で、二人の女性をはさんでひとかたまりになって寝るが、灯を消したかと思うとすぐ、支配人と妻は激しく交わり合うといった具合で、ハリーとシャーロットは、そんなところでとても愛の交わりをすることはできない。ハリーは支配人夫妻から、支配人の妻に墮胎手術をしてほしいと頼まれる。最初は断わろうとするが、シャーロットに勧められるような形で、彼は墮胎手術を行うことになり、その手術に成功する。その後鉱山が閉鎖になり、支配人夫妻は山をおりるが、ハリーとシャーロットは山にしばらくとどまって、閉山後の整理にあたる。

支配人夫妻と同居している間、愛の交わりをすることができなかったシャーロットは、夫妻が山をおりるのを見送るとすぐ、“*Hurry. Six weeks. I have almost forgotten how. No,' she said, 'I'll never forget that. You never forget that, thank you sweet God.'* Then she said, holding him, the hard arms and thighs:...” (p. 197) のように激しくハリーに求める。“*When people loved, hard, really loved each other, they didn't have children, the seed got burned up in the love, passion.*” (p. 205) と信じてハリーと交わり合ったシャーロットは、洗浄器が凍ってしまったために、妊娠してしまう。彼女はハリーの手で墮胎手術をしてくれるように頼むが、彼はそれを強く拒否する。シャーロットを愛するが故に、手術に失敗した場合を心配して拒否するのである。そして暖かい土地へ引越して、赤ん坊が持てるように何か仕事を見つけ、家庭を持とうと決心し、ハリーはシャーロットと共に鉱山をおりて、テキサス州サンアントニオにやってくる。

あくまでも墮胎手術をしてほしいとせがむシャーロットに対して、急場しのぎの方法を思いめぐらし、ハリーは何とか時をかせいで、手術が無理な時期まで引き延ばそうとする。子供など持たず、ハリーと二人だけの生活をし、愛の交わりを続けることによって、愛の理想を探求しようと強く願うシャーロットは、“We cant help it. It’s not us now. That’s why: dont you see? I want it to be us again, quick, quick. We have so little time. In twenty years I cant any more and in fifty years we’ll both be dead. So hurry. Hurry.” (p. 210) と、早く手術をしてほしいとハリーになおもせがむ。結局、シャーロットの激しい要求に負けて、ハリーは彼女に墮胎手術を行うのであるが、その時、彼の手は震えがなかなか止まらない。手術の失敗は、後に彼女が敗血症で死ぬ原因となる。このできごとに関して、Michael Millgate は、次のように述べている。

...although it is characteristic of Wilbourne’s weakness that he both surrenders to Charlotte’s will and fatally botches the operation itself, it is at the same time indicative of his greater flexibility and humanity that he is opposed to the operation and wishes the child to be born.¹²⁾

また、Panthea Reid Broughton は、“Harry then reveals his greater humanity in his reluctance to perform the abortion and then in his inability to perform it with detachment.”¹³⁾と述べている。人間性のあるハリーでありながら、性格の弱さの故に、シャーロットの強さに負けて、まだ生まれていない我が子の生命を奪う墮胎手術を行うことになってしまったといえる。

二人はこの後ミシシッピ州の海岸の別荘を借りて住むことになるが、この別荘の持主は、結婚生活23年になるが子供のいない48才の医師で、別荘のとなりに妻と二人で住んでいて、ハリーとシャーロットを好奇心を持って観察している。シャーロットは、この別荘にいる間に敗血症で死にかかるのであるが、ひん死のシャーロットの治療を頼まれたその医師が、救急車を呼ぶと同時にハリーのことを警察に訴え、ハリーは逮捕され、シャーロットは病院で死ぬ。

シャーロットが死ぬと、彼女の夫フランシスはハリーを救おうと努力し、彼のために保釈金を払い、金を渡してメキシコへの逃亡を勧めるが、ハリーはそれを拒む。フランシスは法廷ではハリーを弁護しようと努力し、ハリーに50年の重労働の刑が確定すると、彼の独房を訪れ、青酸カリを渡して自殺するように勧める。しかし、ハリーは、“...so when she became not then half of memory became not and if I become not then all of remembering will cease to be.—Yes, he thought, between grief and nothing I will take grief.” (p. 324) と考え、シャーロットとの生活で残された唯一のものである思い出に生き、また悔恨に生きるために、50年の刑を受け入れるのである。死ぬことよりも悲しむことを選んだハリーの選択について、Albert J. Guerard は、“heroic moment”¹⁴⁾であると述べ、Panthea Reid Broughton は、本質的に消極的な性格であったハリーが、最後には、“a man of courage, possessing the will to endure and affirming his final heroic stature”¹⁵⁾になったと述べている。

それでは、「オールド・マン」に目を向けてみたいと思う。題名の「オールド・マン」とは黒人たちがミシシッピ河のことを呼ぶ呼び名である。主人公は25才ぐらいの背の高い囚人で、名前は記されていない。物語の中では常に「背の高い囚人」として言及されている。彼は雑誌にのっている西部小説の読みすぎから受けた影響と、恋人のために金がほしいとの思いから、列車強盗を企てて失敗し、19才の時からミシシッピ州パーチマンの州刑務所に、15年の刑を受

けて服役中である。この恋人というのは、安っぽいアクセサリーをじゃらじゃらつけているような女で、彼が刑務所に入ると、1度だけ面会に來ただけで別の男と結婚し、服役中の彼に新婚旅行先から結婚したことを知らせてよこすような女である。

1972年5月ミシシッピ河が氾らんを起こすと、服役中の囚人達は水難救助の応援にかり出され、この囚人はもう一人の囚人と共に、糸杉につかまっている女と綿小屋の棟木にのっている男の救助を命ぜられて、小舟をこぎ出す。濁流にはんろうされて相棒の囚人にはぐれ、男の方は見つけられなくなり、背の高い囚人は女の方だけ小舟に助けあげるが、この女は臨月間近の体である。女と背の高い囚人を乗せた小舟は、囚人の必死の努力にもかかわらず、洪水のため河が逆流し、黄色い流れに流されるままで、ルイジアナ州の沼のような入江を何日も漂流し続ける。女が産産間近であるため、けがなどしながらも、どこか陸地へたどりつこうと必死に小舟をこぎながら、囚人は“turn his back on her forever, on all pregnant and female life forever and return to that monastic existence of shotguns and shackles where he would be secure of it.” (p. 153) したいという思いにかられる。刑務所に入る前につき合った女が悪かったせい、囚人は女性を嫌い憎む一面を持っているのである。このような思いにかられながらも、囚人は女を見捨てることはなく、陸地をさがして小舟をこぎ続ける。“He wanted so little. He wanted nothing for himself. He just wanted to get rid of the woman, the belly, and he was trying to do that in the right way, not for himself, but for her.” (p. 161) という描写は、そういった囚人の行為を説明しているように思われる。Melvin Backman が指摘しているように、“She was, by his hillman’s code, his responsibility.”¹⁶⁾であったのだろう。女を見捨てるようと思えばいつだって見捨てることはできたかもしれないが、妊娠している女を濁流の中に放り出せば、女が死ぬことは目に見えたことであり、正常な意識の人間にはできないことであったと思われる。William Van O’Connor もまた、“His good name and his responsibility prevented his leaving her...”¹⁷⁾と述べて、囚人の責任感にふれている。

二人はそのうち別の舟に出会い、女だけなら乗せてやってもよいと言われるが、囚人はそれを断わり、食料品だけもらって女と二人で陸地をさがし求める。女からのがれたいという思いよりも、囚人の責任感の方が強かったからであろう。やっとのことで二人は陸地にたどりつき、女はそこで出産する。その陸地は蛇などが多くいる土地なので、囚人は大変な苦勞をして女と子供を守り、もらった食料がなくなると、薪をさがし、死んだ兎を拾ってきてシチューにして女に食べさせるなどする。Melvin Backman が、“He lived only as protector and provider, she as mother: together they were like a primitive family.”¹⁸⁾と指摘しているように、囚人は、まるで親子三人の父親のような役割を果たすのである。女は『八月の光』のリーナ・グローヴ (Lena Grove) のようなおおらかさを持ち、見知らぬ囚人の世話になりながら、子供を育てていく。Thomas L. McHaney は、この女と『野性の棕櫚』のシャーロットを比較して、“...there is a great distance between the serenity of the one and the agitation of the other.”¹⁹⁾とそのちがいを指摘している。囚人はある時、赤ん坊を見おろしながら、“And this is all. This is what severed me violently from all I ever knew and did not wish to leave and cast me upon a medium I was born to fear, to fetch up at last in a place I never saw before and where I do not even know where I am.” (p. 231) と考える。囚人がいやだと思いつつも女を守り、出産させ、父親がわりに女と子供の世話をするのは、責任感もさることながら、生命あるものを守ろうとする、彼の人間愛からではないかと思わずにはいられないのである。

三人は小舟に乗り、刑務所のあるパーチマンを目指して再び出発する。“Hush! I wish I was

a snake so I could get out too!" (p. 237) と言いながらも、水中に住む蛇とたたかい、女と子供を守って小舟の旅を続ける囚人の姿は、John Lewis Longley, Jr. も "He shows endurance, courage, resourcefulness, and restraint."²⁰⁾と述べているように、まさに彼の忍耐や勇気を表わしているといえる。三人は蒸気船に出会い、途中まで乗せていってもらうが、また、三人だけの小舟の旅にもどる。囚人は常に女と子供を守るのみで、決して女と sexual な関係をもつことはしない。漂流を続けるうちに、言葉の全く通じないアケイディア人に出会い、囚人はこの男と協力して10日間ほどわに捕りをする。堤防が爆破されることになり、アケイディア人と別れたあと、三人は発動機船に拾われてしばらく進むが、再び小舟の旅にもどり、ニューオリンズにたどりつく。そこで河の流れが変わり、三人はミシシッピ河をさかのぼり、途中何日もかかって、道々製材所や綿畠などで仕事を手伝って生活をしながら、ようやくのことでミシシッピ州にもどってくるのである。

安定と秩序のある刑務所での生活を望んでいる囚人は、女と子供を連れて、自ら役人に名のり出るのだが、囚人の相棒が刑務所に帰って、彼は死んだと報告していたため、役人の方ではすでに正式の死亡報告書も作成済みである。そこへ突然囚人が現われたため、責任逃れのためにあれこれ思案したあげく、結局、この背の高い囚人には、脱走を企てたというかどで、さらに10年の刑を加えることにする。背の高い囚人は、至極平然としてその刑を受け入れ、あと10年も女なしでやっていくのは厳しいと同情する相棒の囚人に向かって、"Women...t!" (p. 339) とただひとこと言うが、それがきわめて印象的である。

III

「野性の棕櫚」に描かれた愛と、「オールド・マン」に描かれた愛を、ストーリーを追いながら見てきたわけであるが、ここで二つの物語を対照して考えてみたい。この二つの物語には、共通する点と対照的に異なる点の両方があると考えられるが、まず共通する点について考えてみるならば、ハリーはシャーロットの黄色い目にもつめられて彼女のとりこになり、彼女の強さに引きずられていったのに対して、背の高い囚人は犯らんを起こしたミシシッピ河の黄色い流れに流されるというように、ハリーも囚人も、何か自分の意志を超えた黄色いものに流されていった点があげられる。また、27才まで女性とつき合ったこともなかったハリーと、小説をまねして列車強盗を企てて失敗した囚人は共に、Hyatt H. Waggoner が、"There is a striking similarity in the nature of the two men, the doctor and the convict. Both are portrayed as innocents, trapped, taken in, because of their ignorance and naivete... Both are trapped by their lack of knowledge of the world."²¹⁾と指摘しているように、無知で、純真で、世間知らずであったことも共通する点であるといえる。

対照的な点は、見方によっていろいろ考えられるが、きわめてはっきりしているのは、言うまでもなく、二つの愛のちがいである。ハリーとシャーロットの愛は、男と女の間の romantic な愛、情熱的な愛であり、sexual な関係とは切り離すことのできない愛である。性格の弱いハリーがシャーロットの強さに引きずられていき、二人だけの生活を続け、sexual な関係を通して、愛の理想を探求しようとするシャーロットの要求に負けて、ハリーが我が子の生命を奪う墮胎手術を行った点から考えると、きわめてエゴイスティックな愛といえる。一方、背の高い囚人は、女からのがれたいと思いつつも、濁流の中で大変な苦勞をしながら、女を陸地まで連れていき、出産させ、女と sexual な関係は一切持たず、女と子供を守るのである。これは、囚人が自らはっきりと意識していなかったにしても、生命あるものを守ろうとする人

間愛としか考えられない。

我が子の生命を奪うハリート、他人の子の生命を誕生させ育てる囚人とはきわめて対照的であるが、共通する点のあるハリートと囚人であるが故に、対照的な面がより一層強調されるように思われる。また、この二つの対照的な愛をながめてみたとき、Faulkner が音楽の対位法のような効果をねらったという意味が明らかになってくると考えられる。Faulkner は、『野性の棕櫚』において、初めて愛という問題に真っ向から取り組み、情熱的でエゴイスティックな、sexual な愛を描く一方で、その対極に置かれるべき人間愛を描いたといえる。そして、この人間愛こそ、Faulkner が後にノーベル賞受賞のスピーチでふれる compassion を伴った利他的な愛である。このことを考えたとき、Faulkner の作品の中で、『野性の棕櫚』の果たす役割は大きいと思わざるを得ないのである。

注

- 1) Meriwether, James B. and Millgate, eds.: *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962*, 32, University of Nebraska Press (1980)
- 2) Meriwether and Millgate, 54
- 3) Faulkner, William: *The Wild Palms*, 33~34, Vintage Books (1966) 以下テキストからの引用は全てこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内にそのページを記す。
- 4) Moldenhauer, Joseph J.: "Unity of Theme and Structure in *The Wild Palms*," in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick Hoffman and Olga W. Vickery, 309, Harcourt, Brace & World (1963)
- 5) Brooks, Cleanth: "The Tradition of Romantic Love and *The Wild Palms*," *Mississippi Quarterly*, **25**, 285 (1972)
- 6) Swiggart, Peter: *The Art of Faulkner's Novels*, 53, University of Texas Press (1962)
- 7) Richardson, Kenneth E.: *Force and Faith in the Novels of William Faulkner*, 69, Mouton (1967)
- 8) Page, Sally R.: *Faulkner's Women: Characterization and Meaning*, 127, Everett/Edwards (1972)
- 9) Page, 123
- 10) Moldenhauer, 310
- 11) Tuck, Dorothy: *Crowell's Handbook of Faulkner*, 139, Crowell (1964)
- 12) Millgate, Michael: *The Achievement of William Faulkner*, 172, Vintage Books (1966)
- 13) Broughton, Panthea Reid: *William Faulkner: The Abstract and the Actual*, 169, Louisiana State University Press (1974)
- 14) Guerard, Albert J.: *The Triumph of the Novel: Dickens, Dostoevsky, Faulkner*, 209, Oxford University Press (1976)
- 15) Broughton, 172
- 16) Backman, Melvin: *Faulkner: The Major Years: A Critical Study*, 132, Indiana University Press (1966)
- 17) O'Connor, William Van: *The Tangled Fire of William Faulkner*, 107, Gordian Press (1968)
- 18) Backman, 131
- 19) McHaney, Thomas L.: *William Faulkner's The Wild Palms: A Study*, 139, University Press of Mississippi (1975)
- 20) Longley, John Lewis, Jr.: *The Tragic Mask: A Study of Faulkner's Heroes*, 31, University of North Carolina Press (1963)
- 21) Waggoner, Hyatt H.: *William Faulkner: From Jefferson to the World*, 141, University of Kentucky Press (1966)

(本稿は東海英米文学会第2回大会における口頭発表に基づいている。)